

原 著

D. H. ロレンス：*Smile* における「笑い」について

清 水 雅 子

川崎医療福祉大学 医療福祉学部 医療福祉学科

(平成4年10月21日受理)

On Laughter and Smile in D. H. Lawrence's *Smile*

Masako SHIMIZU

*Department of Medical Social Work
Faculty of Medical Welfare
Kawasaki University of Medical Welfare
Kurashiki, 701-01, Japan
(Accepted Oct. 21, 1992)*

Key words : mechanism of laughter, psychical strain, mind and flesh, hat and hand

Abstract

D. H. Lawrence's *Smile* is a short but very impressive story whose theme is "laughter" or "smile".

"Laughter" may be regarded as one of the emotional movements of human beings that expresses the complex psychical mechanism of the unconsciousness.

In this thesis, we are going to show how appropriate and reasonable Lawrence's description of "laughter" or "smile" is in the light of the "mechanism of laughter". We will also discuss whether or not Matthew's laughter and smile provoked by his dead wife, Ophelia, are a very primitive emotional movement and whether their source is in the flesh in a Laurentian sense or not.

要 約

D. H. ロレンスの短編 *Smile* は「笑い」(微笑み)がテーマである興味深い作品である。「笑い」は人間の計り知れない複雑な精神活動を表す情動運動と見なされる。本稿では *Smile* における「笑い」の描写は「笑いのメカニズム」に照らしても適切であり、また、死んだ妻が起因となって誘発された主人公マッシュウの「笑い」は、無意識的な《人間の肉体の領域》に源を発する原初的な活動であるという意味で「肉体性」と同義であることを考察する。

はじめに

D. H. ロレンスの数多くの作品に登場する人物達を想起する時、我々は彼らに怒りや嘆きや憎悪や諦めなどの感情表現を重ねることはできても、その表情に「笑い」は無緑のように思う。しかし、たとえば生真面目な性格のモレル夫人 (*Sons and Lovers*) も、現代文明社会に嫌悪と深い失望を示すパーキン (*Women in Love*) も、あるいは人間関係の亀裂を味わい、世間との個人的接触を恐れる森番メラーズ (*Lady Chatterley's Lover*) も笑い、微笑むのである。アナ (*The Rainbow*) にいたっては、教会の礼拝中に、ウィルのハンカチからスグリの花が落ちたからという理由にもならない理由で身悶えせんばかりに笑い続ける。アーシュラとグドラン姉妹 (*Women in Love*) はパーティへ向かう道すがら、両親の世間離れした服装ともったいぶった歩き方がおかしいと言って笑いが止まらなくなる。このように、ロレンスの作品における登場人物と笑いとは決して無関係ではなく、むしろ彼らの笑いには冷笑、嘲笑、哄笑、苦笑、自嘲の笑い、いたわりや同意の微笑みなど、プロットに関わり、登場人物達の内面的な心の動きを表す種々の笑いが見られる。

Smile (1924)¹⁾は、ひとりの男が妻の死顔に笑いを誘発され、その笑いが同席する三人の尼達に伝わり、さらに男は妻にくすぐられているような感覚を覚えるが最後には永久に笑わなくなってしまうというプロセスを描いたわずか数頁の短編である。特にこの短編は「笑い (laughter)」や「微笑み (smile)」そのものがテーマであることに特徴があり興味深い。本稿は *Smile* における「笑い」のメカニズムを分析し登場人物の心的状態を解明することによって、「笑い」が何を示唆するかを考察することを目的とする。

1. 「笑い」とは何か？

論を展開するにあたって「笑い」を定義する必要がある。

「動物の中で笑うのはヒトだけである」²⁾と言ったのはアリストテレスであった。笑いを人間固有の現象として限定してしまうには多少問題

がある³⁾としても、笑いは人の最も原初的な情動運動⁴⁾であり、しかも極めて高度な精神機構を示す⁵⁾現象であることは言うまでもない。ベルグソンはアリストテレス以来、笑いのまとなり続けた「哲学」の立場から喜劇に見事な報復を果たした (1900) が、彼は特におかしみの笑いを、人間に固有であり純粋理智に訴えて社会的機能を持つと定義した。「純粋理智の人たちの社会において人はもはや泣くことはないであろう。だが依然として恐らく笑うことはあるであろう」⁶⁾というベルグソンの言葉は、人間の感情表現の中での笑いの優位を表していると言えよう。ベルグソンと時を同じくしてフロイトの「機智—その無意識との関係」(1905)が刊行され、笑いを他の精神活動と同様に計測しうる量的エネルギーとするエネルギー論が確立された。その後、哲学、芸術、科学のあらゆる分野で笑いは研究対象であり続けているが、哲学的見解はベルグソンの垂流であり、笑いのメカニズムの解明はフロイトの変型である⁷⁾ようだ。G. マドラーが「笑いの機構とは何であるのか、また心理学的にこれほど助言されているにもかかわらずほとんどわかっていない」⁸⁾と嘆くように仮説の域を出ないのが実態のようである。

このように笑いについての諸説をみても決定的な笑いの定義に出会うことが出来ないのであるから、「笑いとは何か？」を明らかにすることは筆者には不可能である。しかし、恐らく笑いに関するすべての見解に共通するのは、それが人間の計り知れない複雑な精神機構・活動を表す形態のひとつであるという認識であろう。「笑い」は精神あるいは心、あるいは精神分析流に言えば無意識の領域に潜む形のない何か、その外部にある事柄、事態に知覚神経あるいは意識が反応する結果であり、したがって我々は逆に笑いという生理神経的な情動運動を通して人間の精神 (あるいは心・無意識) の状態を知ることができる。この点で人間の精神活動を表現対象とする文学作品の解明においても、笑いが登場人物の心的状態・活動を理解する重要な指標となると考えられる。

以上のような認識に基づいて、まず *Smile* における笑いのメカニズム表現の分析から考察を

始める。

2. マッシュウはなぜ笑ったか？

— 笑いのメカニズムの表現分析 —

Matthew ⁽¹⁾saw the dead, beautiful composure of his wife's face, ⁽²⁾and instantly, ⁽³⁾something ⁽⁴⁾leaped like laughter ⁽⁵⁾in the depths of him, he gave a little ⁽⁶⁾grunt, and an ⁽⁷⁾extraordinary smile came over his face. (*Smile* : pp. 83-84. 以下本書引用文は頁数のみ記入。番号、ゴチ、筆者、以下同様)

上記引用文はマッシュウの笑いが発生する場面の描写である。笑いの発生には必ず起因あるいはきっかけがあるが、彼の笑いの起因は妻の顔に覆われていた白い寒冷沙の布を取り上げた直後に生じる。その起因は「妻の美しく平静な顔」であった。死者の場に「笑い」はふさわしくないうえに、「美しく平静な顔」がきっかけとなって笑いが生じるのも意外である。また笑い (laughter) が微笑み (smile) に変化して表出する点にも特徴がある。

笑いの発生についてカントは「期待が突然無に帰した時」、ショーペンハウエルは「ある概念とその実際のものとの間に食い違いがある時」、ベルグリンは「感情を一時的に麻痺させた場合、生命が機械的なこわばりを帯びる時」笑いが生じると説明する。フロイトは「同時もしくは瞬時に、ひとつの表象作用に適用された二つの異なる方向の間で〈比較〉が行われ、差異が生じた時」というエネルギー論を展開し、ケストラは「一つの連想から他の連想に思考が移る時、感情荷が理性に置き去りされ緊張がそのはげ口を笑いの中に見出す」としてエネルギー論を発展させた。これらの諸説から、刺激(情報)と予期した事・姿(概念・期待)との間に照合が行われた際生ずるずれが、それまでの心的緊張を弛緩させ、それまで蓄積したエネルギーが放出された時、笑いという形になるという笑いのメカニズムの図式が考えられるのである。

上記引用文におけるマッシュウの笑いをこのような図式に基づいて分析すると彼の笑いの起因とその性質が見えてくる。そしてこの描写が極

めて理にかなっていることが明らかにされるであろう。

(1) saw (the dead beautiful composure of his wife's face)

情報(死んだ妻の美しく平静な顔)が視覚を刺激する。知覚動詞 saw は、笑いという精神機構と関わる情動的表出運動が脳の視覚を経由することを表現する。

(2) and instantly

刺激を受けた視視野から神経伝導がなされるその速度を適切に表現する。

(3) Something……like laughter

マッシュウに刺激を与えた情報(死んだ妻の顔)と予期していた顔(記憶から引き出された顔)とが照合された結果、ずれが生じ不明瞭な形で笑いが生ずる。something とは笑いがまだ情動運動として表出されないことを表現する。

(4) leaped

それまで抑圧されていた心的緊張が弛緩しエネルギーが表出する動きを示す。

(5) in the depths of him

笑いが笑いそのものではなく笑いに似た何か(something like laughter)であるのは、笑いが心の深奥での活動であることをこの表現は表している。

(6) he gave a grunt

ぶつぶつという、他者には音声としては聞こえるが内容を正確には聞きとれない話者の内在的な声は、マッシュウの意識の下方で無意識的調整が行われたことを示す。

(7) extraordinary smile

smile (微笑) は、小此木によると「みたされ、心地よくなって微笑む」という、快い内的充足感の生理的表現であって、…その心理作用という点で…むしろ何らかの心的緊張(例えばくすぐられ快感やおかしさの高まり)の解消の結果生じたりラックスした状態を伴う表情である¹⁰⁾。あるいは木村は「われわれが通常の意識—思考過程において行う意図的もしくは意識的なりアリティの無化…が〈微笑〉の多くであって

…「軽微」な笑いと同様の表情をとるものと思われる。」¹¹⁾と解釈する。マッシュウの場合、一度心奥で起きた laughter が grunt によって解消され、笑いのリアリティが無化された結果 smile に変化したと考えられよう。しかし extraordinary という微笑の性質を規定する形容詞は「異常な」「奇妙な」「風変わりな」などのいずれの意味でも標準からずれたマッシュウの心的状態を表していると言える。

このように見てくると、ロレンスの笑いの描写が、神経生理学的な笑いのメカニズムにかなっており、またマッシュウの笑いに固有の特徴をも示していることが理解される。つまり彼の笑いはその起因が妻オフィーリアに対する心的状態にあり、彼に心的緊張をもたらせた結果であると考えられるのである。

3. 何がマッシュウに心的緊張をもたらしたか？ — マッシュウの心に潜在する妻への罪悪感 —

He had decided to sit up all night, as a kind of penance. The telegram had simply said: 'Ophelia's condition critical.' He felt, under the circumstances, that to go to bed in the wagon-lit would be frivolous. So he sat wearily in the first-class compartment as night fell over France. (p 82)

作品冒頭からの上記引用文ではマッシュウの心的状態が伝えられる。危篤の妻オフィーリアのもとへ夜行列車に乗って急ぐマッシュウは刑罰 (penance) として眠るまい (decided to sit up all night) と意志力で決心し、眠るのは軽薄 (frivolous) と感じ、疲れている (wearily) にもかかわらず車室に座わったままである (sat) のである。この一見夫として当然のようにみえる心理描写からマッシュウの義務感、他律性の強さが推測される。彼は妻が死なないでほしいと願って、居ても立ってもいられない夫の心情から眠れないのではなく、このような状況では眠るべきではないから眠らないのである。そのよ

うな傾向は以下に引用するように、彼が妻の終焉の場所「青い尼」の家に到着するまでの描写によって裏付けられる。

He ought, of course, to be sitting by Ophelia's bedside. But Ophelia didn't want him. So he sat up in the train.

Deep inside him was a black and ponderous weight: like some tumour filled with sheer gloom, weighing down his vitals. He had always taken life seriously. Seriousness now overwhelmed him. His dark, handsome, clean-shaven face would have done for Christ on the Cross, with the thick black eyebrows tilted in the dazed agony.

The night in the train was like an inferno: nothing was real. Two elderly Englishwomen opposite him had died long ago, perhaps even before he had. Because, of course, he was dead himself.

Slow, grey dawn came in the mountains of the frontier, and he watched it with unseeing eyes.

And his monk's changeless, tormented face showed no trace of the contempt he felt, even self-contempt, for this bathos, as his critical mind judged it.

He was in Italy: he looked at the country with faint aversion. Not capable of much feeling any more, he had only a tinge of aversion as he saw the olives and the sea. A sort of poetic swindle. (p.82)

マッシュウは、危篤の妻の傍にいるべき (ought to) であるという義務感と離れているのは妻がそう望んだためであるという自己正当化に裏付けられた代償行為として、眠らず車中で座わり続けている。心にかかった重圧は、人生を真剣に考えようとする意識の強さ、他律的な生き方に由来する。monk (僧侶) というマッシュウを形容する比喩表現は、例えば Christ on the Cross, with the thick black eyebrows tilted in the dazed agony, watched with unseeing eyes な

どの語句と相俟ってマッシュウの心的緊張状態をよく伝える。しかし彼の心的緊張は妻の危篤という異常な事態によってもたらされただけではなくその人間性に由来していることが、monkが後で再度用いられていることや、looked at the country with faint aversion,あるいはcritical mindといった語句からも推測出来るのである。

少なくともここには、人生・生活を楽しむのは罪悪であるとみなす柔軟性に乏しく生命の躍動の欠如した人間像が浮かび上がる。したがって眠ることを妻への冒瀆と思うマッシュウの罪悪感から心的緊張が生じ、妻に出会うまで緊張が維持され高まり続けているのは事実であるが、その罪悪感にはマッシュウの人間性に由来していると言ってよく、それが彼の心的緊張をもたらした本質的な要因と考えられるのである。そのような笑いからほど遠い状態の彼が妻の顔を見た瞬間、笑いを起こしたのは、妻の顔が予想に反して「美しく平静」であったため、罪悪感によって生じたそれまでの心的緊張から解放され弛緩した結果であると解釈出来るのである。

4. オフィーリアはなぜ12回もマッシュウを離れたのか？

They had been married ten years. He himself had not been perfect—no, no, not by any means! But Ophelia had always wanted her own will. She had loved him, and grown obstinate, and left him, and grown wistful, or contemptuous, or angry, a dozen times, and a dozen times come back to him. (pp. 84-85)

オフィーリアが夫から離れては戻るという行動を12回も激しく繰り返したのは、彼女がマッシュウとは対照的な、感情を生のままに発散する直情型の女性であったからとも思える。しかしそれはマッシュウ自身の「自分は完全な夫ではなかった、いや決して完全ではなかった」という内声の言葉にオフィーリアの異常とも思える行動の原因が表れていると考えられる。逆に言えばマッシュウの不完全さを補うものをオフィーリアは求めたのである。そして最後まで得られず

13回目には永久に彼から離れてしまったのであるが、その不完全を補うものの実体は何であったのであろうか？、上記引用文に続く描写からそれが「笑い」であったと推察出来る。なぜなら次に引用するようにオフィーリアは13回目に再び出会った時に、三度に亘って夫をくすぐり笑わせようとするからである。

Now she would never come back to him. This was the thirteenth time, and she was gone forever.

But was she? Even as he thought it, (1) **he felt her nudging him somewhere in the ribs, to make him smile.** He writhed a little, and an angry frown came on his brow. **He was not going to smile!** He set his square, naked jaw, and bared his big teeth, as he looked down at the infinitely provoking dead woman. 'At it again!'—he wanted to say to her, like the man in Dickens.

He himself had not been perfect. (2) **He was going to dwell on his own imperfections.**

He turned suddenly to the three women, who had faded backwards beyond the candles, and now hovered, in the white frames of their coifs, between him and nowhere. His eyes glared, and he bared his teeth.

'**Mea culpa! Mea culpa!**' he snarled.

'Macchè!' exclaimed the daunted Mother Superior, and her two hands flew apart, then together again, in the density of the sleeves, like birds nesting in couples.

Matthew ducked his head and peered round, prepared to bolt. The Mother Superior, in the background, softly intoned a Pater Noster, and her beads dangled. The pale young sister faded farther back. But the black eyes of the study, black-avised sister twinkled like eternally humorous stars upon him,²⁾ **and he felt the smile digging him in the ribs again.**

'Look here!' he said to the women, in

expostulation, 'I'm awfully upset. I'd better go.'...

But he insisted on dwelling upon his own imperfections. *Mea culpa!* he howled at himself. And even as he howled it, (3) he felt something nudge him in the ribs, saying to him: *Smile!* (p. 85)

上記描写には「死人に口なし」でなぜオフィーリアがマッシュウを三度に亘ってくすぐり続けたのか、理由は書かれていない。笑いが発生する場には「笑う人」と「笑われる人」がいるが、くすぐり笑いには小此木によれば両者の「くすぐりっこ」がもとにあるという。その「くすぐりっこ」について小此木は思いつきであるがと断って、次のように述べている。

くすぐり笑いは、本来「くすぐりっこ」の中で起こるのがより起源的であって、「くすぐりっこ」は、お互いに、性器愛以前の段階で、快感を与えてふざけあう“遊び”である。この場合は、お互いに、それ以上の性器愛的な関係に入ることを自制しあい、またそれ以上のサド・マゾ的な関係になるのも避けあって、適度の快と適度の自己を主張しあうわけで、この「くすぐりっこ」及びそれに伴う快感とその緊張解消作用こそ、乳幼児の微笑反応と並ぶ社会化された笑いコミュニケーションの起源であろう¹²⁾。

フロイトを研究の出発点とする小此木らしい考えであるが、恐らくオフィーリアのくすぐりにも同様の意図があるように思われる。彼女はマッシュウとの性愛的な（必ずしも性器愛的ではない）安らぎと暖かさから生まれる“適度の快”と“適度の主張”をもつ人間関係を望んだのではないだろうか。しかし、彼はくすぐられながらもその度に *imperfection*（不完全）だと思ひ *Mea culpa!*（私のせいだ!）という道徳観念から妻に罪悪感を抱き心の奥深くにある笑いの源泉を抑えようとする。マッシュウは笑いが肉体的な快を与えるコミュニケーションであると理解するためにはあまりにも義務感・責任感・他

律性には束縛された人間であった。

5. マッシュウの〈帽子〉と尼達の〈手〉は何を象徴するか？

Smile は以下のように象徴的な描写で終る。

'Pardon, ma Mère!' he said, as if in the street. *I left my hat somewhere...*

He made a desperate, moving sweep with his arm, and **never was man more utterly smileless.** (p. 86)

〈帽子〉は文脈から判断する限り「妻」の象徴である。これまで見てきたように妻はマッシュウの笑いの起因であったし、彼が帽子を置き忘れた「この時の彼ほど全くほほえみのない男はかつてなかった」という末尾文は、マッシュウが妻を失うことで彼の不完全を補う重要な必要要素であった笑いを永久に喪失することを暗示するからである。

昌頭の車中でのマッシュウの描写に見られるストイックな態度、あるいは妻にくすぐられているような感覚を覚えながらも道徳的な発想をくずさない姿勢から、彼が笑いを解したり我を忘れるほど笑ったり、また笑いによってコミュニケーションを行なうようなタイプの人間ではないのは明らかである。が、そうかといって完全に笑いの欠如した人間ではなかった。実際、妻の死顔を見て微笑んだし、妻に横腹をつつかれて笑いを引き起こされたのである。したがってマッシュウは笑いの欠如した人間というより笑いを抑圧する人間と見る方が適当であろう。それはマッシュウが尼達の〈手〉を意識する描写にも示唆されているように思える。

〈手〉はマッシュウが「青い尼」の家に到着し妻の棺の前に立つまでの間に、以下のように3回現われる。

(1) The Mother Superior softly put her white, handsome hand on his arm and gazed up into his face, leaning to him. (p. 83)

(2) The young nun unfolded her white

hands and shyly slid one into his, passive as a sleeping bird. (p. 83)

- (3) and Matthew was aware of **creamy-dusky hands** twisting a black rosary, against the rich, blue silk on her bosom. (p. 83)

そしてストーリーの終りに近い場面に次のように再び〈手〉が描かれる。

They hovered in fascinating bewilderment. He ducked for the door. But even as he went, the smile began to come on his face, caught by the tail of the sturdy sister's black eye, with its everlasting twink. And, he was secretly thinking, he wished he could hold both **her creamy-dusky hands**, that were folded like mating birds, voluptuously. (p. 85)

妻の死の場面に笑いが似つかわしくなかったように、尼達の手を妻の死の前にして意識するのも不自然に思える。けれども頻出する尼達の手は、マッシュウの心の奥に抑圧されて意識化しない自然な欲望を象徴すると思われる。

〈帽子〉はフロイトの夢解釈の用語ではなく、〈男性の生殖器〉¹³⁾を意味する。ロレンスは当時のヨーロッパ人の間で大きな話題となったフロイトの精神分析の洗礼を受けた一人であるというものの、フロイトの〈帽子〉を知っていたかどうか不明である。しかし、マッシュウがどこかに置き忘れた〈帽子〉は、フロイトの〈帽子〉と同じ次元の〈人間の肉体的な領域〉を象徴すると考えられる。ここでは〈帽子〉は笑いの起因であった妻の象徴であり、それは尼達の手を意識するマッシュウの無意識の欲望と共通すると考えられ、次のような等式でまとめることが出来る。

帽子 = 妻 (笑いの起因) = 肉体性 = 尼達の手

ロレンスの場合、肉体性は必ずしも精神性と相容れないわけではない。*Smile* においても例

えば、精神性に生きる尼達の中にマッシュウの微笑みがきっかけとなって笑いが次々と伝播し、僧院長でさえ笑いを抑えきれず下を向いてしまう。尼達の笑いの伝播は、ベルグソンの言う「笑いの社会性」を表現したものとみなされるが、ロレンスの笑いが肉体的領域を象徴するとすれば、それがコミュニケーションに不可欠であるひとつの重要な要素と考えたロレンスの意図が理解されよう。また、ロレンスのいう肉体性とは、肉体のみの肉体主義を意図するものではなく、人間に本来備っている原初的なエネルギーとでも言える性質のものであると理解されよう。

僧院長は暇を告げたマッシュウを“*Poor things*”と表現する。それは妻に死なれた境遇を「お気の毒に」という常識的な意味ではなく、心から笑うことの出来ない人間性を哀れんでの言葉である。オフィーリアの顔に表れた「かすかな皮肉めいたひきつり」は、笑うことの出来る肉体的な温さを求め、最期まで得ることの出来なかった自嘲の笑いであったかも知れない。

結び — 笑いは肉体性と同義語である —

短編 *Smile* はロレンスの晩年の作品であるが、既に初期の長編小説 *Sons and Lovers* に笑わない人間の典型—主人公ポールの初恋の少女ミリアム—が登場する。

ポールがミリアムとの愛にずれを感じ始めたころ問いかける場面がある。

「どうしてきみは笑えないの?…きみは腹の底から笑うように笑うことなんかないね。きみは何かおかしいことかばかげたことであると笑うぐらいで、それさえもきみ自身が傷つくように思えるよ」…「ぼくのことをほんとうに一分間でいいから笑ってくれたらな。そうしたらぼくは何か取りのけられたように感じると思うんだ」…「ぼくはきみといるといまいましいほど精神的になってしまうんだ」(伊藤整訳)

ポールの焦らだち、苦しみは、笑いを罪悪とみなすミリアムの精神性に起因している。笑えないミリアムは、ポールには自分の大部分を占

める肉体を受けとめてくれることなく精神性のみ生きる女性を意味した。彼が少年のころから共に書物を読み、散歩し、語り、絵の批評を受けたりしながら育ててきたミリアムとの愛に訣別する決心を伝える手紙には、「自分を一分でもいい、笑ってほしい」と言った「笑い」が「肉体性」と同義語であることがよく表われている。

「あなたは尼です。ぼくがあなたに与えるような—神秘的な僧侶が神秘的な尼に与えるような—ものでした。…ぼくは感覚的にもものを言っているわけではありません。むしろ精神的な立場から言っています。…ぼくたちふたりの愛情には肉体的なものが入ってきたことはありません。」(伊藤整訳)

尼と形容されたミリアムと、僧侶と形容されたマッシュウは同質の人間であり、精神性のみ生きる肉体のもつ温かさを失った rigid な人間を表そうとするロレンスの意図がある。肉体性を無視した人間は imperfect であり whole man (全人) として生きることは出来ないというロレンス特有の人間観は *Sons and Lovers* 執筆時に確立し¹⁴⁾、生涯のテーマともなった。この信念は *Smile* の「笑い」の意味を理解する手がかりともなる。

ベルグソンは、本稿始めに触れたように笑い

を純粹理智に訴える高度な精神活動の発動とみなしたが、ロレンスにとって笑いは人間の本性に源を発する原初的な活動であるという意味で、肉体性と同義である。それはポールの手紙にも見られるように、精神性と対立するものではなく、むしろ、精神性は肉体性に裏うちされずして生きることは出来ないというのがロレンスの考えであるようだ。したがって、*Smile* における「笑い」は意識以前の原初的な状態—フロイトやユングの用語で言えば無意識と呼べるような—に潜む肉体性に源を発し、情報(刺激)を受け照合が行われた際に生ずるずれによって引き起こされる活動(運動)の表現であると言える。マッシュウもミリアムも、誰もが潜在的に持つ無意識的なエネルギーである笑いを意識によって抑圧し、自然なコミュニケーションの出来ない孤独な人間として描かれている。ロレンスはそのような人間の姿に、精神主義、知性偏重、肉体のみの肉体主義に生きる現代の人々の「タイプ」を表そうとしている。それはロレンスのめざした全人 (whole man) —精神と肉体のバランスのとれた人間—からはほど遠い不完全な (imperfect) 姿であった。

小品 *Smile* は、これまでみてきたように「笑い」の適切な表現と共に、現代人の普遍的なタイプを示唆している点にも作品価値を見出すことが出来る。

文 献

- 1) Lawrence D H (1965) *Smile. The Woman Who Rode Away and Other Stories*, Penguin Books Ltd, England, pp 82—86.
- 2) アリストテレス (1973) 動物部分論. 島崎三郎訳, アリストテレス全集 8, 初版, 岩波書店, 東京, pp 354.
- 3) 荘巖瞬哉 (1989) 表情とコミュニケーション. ヒトの行動とコミュニケーション—心理生物学的アプローチ, 初版, 福村出版, 東京, pp 354.
- 4) 同上, pp 42, pp 149—150.
- 5) 木村洋二 (1989) 笑いの社会学, 2 版, 世界思想社, 京都, pp 2.
- 6) ベルグソン, 林達夫訳 (1991) 笑い, 2 版, 岩波書店, 東京, pp 14.
- 7) 同上, ベルグソン以後—改版へのあとがき—, pp 209—210.
- 8) マドラー G 田中正敏・津田彰監訳 (1987) 生物学の情動. 情動とストレス, 初版, 誠信書房, 東京, pp 230.
- 9) 木村洋二 (1989) 序. 笑いの社会学, 2 版, 世界思想社, 東京, pp 2—4.
- 10) 小此木啓吾 (1991) 微笑と笑い. 笑い・人みしり・秘密, 初版, 創元社, 東京, pp 6—8.
- 11) 木村洋二 (1989) 笑いのメカニズム. 笑いの社会学, pp 53—44.

- 12) 小此木啓吾 (1989) 笑い. 笑い・人みしり・秘密, pp 15.
- 13) 馬場謙一, 鈴木美登利, 乾 吉祐, 吉田尚子, 深津千賀子, 佐野直哉, 小此木啓吾 (1978) 無意識の発見. 小此木啓吾, 馬場謙一編, フロイト精神分析入門, 初版, 有斐閣, 東京, pp 66.
- 14) Lawrence D H (1956) *Foreword to Sons and Lovers*. ed Aldous Huxley, *The Letters of D. H. Lawrence*, Heinemann, London, pp 95-102.